

福島県のアスパラガス露地栽培における 茎枯病の体系防除

福島県農業総合センター ^{はた}畑 ^{ゆうき}有季・^{ししど}宍戸 ^{くにあき}邦明

はじめに

アスパラガス茎枯病 (*Phomopsis asparagi*) は、立茎した養成茎に病斑を形成し、進展すると茎全体を黄化、枯死させ、株の衰退を招く(図-1)。本病は、前作の罹病残渣上で越冬した病原菌が第一次伝染源となり、降雨時の水の跳ね上がりにより飛散し、感染が拡大する(酒井ら, 1992)。そのため、本病が発生した翌年には、春の収量や秋における生育量が大幅に減少し(児玉ら, 1984)、アスパラガスの栽培に大きな影響を与える。

多くのアスパラガス産地において、茎枯病の発生が問題となってきたことから、これまでに様々な取り組みがなされてきた。特に本病は降雨により発生が拡大することから、耕種の防除法として雨よけ栽培による対策は有効で(小林・新須, 1990; 竹川・相野, 1994)、西南地域の産地では施設化が進んでいる。福島県においても、病害対策や作期拡大を目的に施設化を推進しているが、県内の80%の圃場が露地栽培であり(平成27年度)、依然として茎枯病による被害が深刻な問題となっている。

本病の発生生態として、萌芽後の日数が少ないほど感染しやすく、萌芽直後2週間以内の茎では特に感染しやすいことが報告されている(芦沢ら, 1983)。それに対し、茎枯病の発生が問題となるような現地圃場では、立茎後の防除開始時期の遅れや防除間隔が長い事例も見受けられる。

本稿では、露地栽培のアスパラガスに有効な薬剤散布体系を明らかにするため、各種薬剤の防除効果と、本病の発生生態に応じて立茎後の防除を重視した体系防除について調査したので、紹介したい。

I 茎枯病に対する各種薬剤の効果 (ポット試験)

本病に農薬登録のある TPN 水和剤、アゾキシストロピン水和剤、ベノミル水和剤、水酸化第二銅水和剤の4種薬剤(表-1)の茎枯病に対する予防効果と残効につい

て調査した。

供試苗は7.5 cm ポットに移植した1年生苗(品種‘ハルキタル’)の地上部を株元から刈り取り、14日後に再萌芽した茎葉(1ポット1茎)を用いた。試験は、各種薬剤を25 ml/株散布した後、薬剤散布直後接種区と薬剤散布7日後接種区を設け、分生子濃度 10^5 個/mlに調整し、0.01%となるよう Tween20 を加えた胞子懸濁液を20 ml/株噴霧接種した。なお、薬剤散布直後接種区は茎葉に付着した薬剤が乾燥した後、接種した。苗は温度25℃、湿度100%暗黒条件下で48時間管理した後、ガラス室へ移動し底面給水により管理した。

接種21日後に、茎葉の症状を発病程度別に調査したところ、薬剤散布の直後に接種した区では、TPN 水和



図-1 アスパラガス茎枯病の病斑

表-1 ポット試験の供試薬剤

薬剤(商品名)	希釈倍数	展着剤
TPN 水和剤(ダコニール 1000)	1,000 倍	無
アゾキシストロピン水和剤 (アミスター 20 フロアブル)	2,000 倍	無
水酸化第二銅水和剤(コサイド DF)	1,000 倍	有
ベノミル水和剤(ベンレート水和剤)	2,000 倍	有

Integrated Diseases Control of Stem Blight on Outdoor Grown Asparagus in Fukushima Prefecture. By Yuki HATA and Kuniaki SHISHIDO

(キーワード: アスパラガス, 茎枯病, 体系防除)